

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「ローソン、紙の弁当箱 プラ使用量、年9.9トン減へ」
- 2) 「すかいらーく、食べきれなかった料理の持ち帰り推奨で食品ロス削減」
- 3) 「日本テトラパック、ミネラルウォーターを紙容器で複数メーカーに供給開始」
- 4) 「米ウーバー、エコカー配車可能に」

---

1) 「ローソン、紙の弁当箱 プラ使用量、年9.9トン減へ」

ローソンは、環境に配慮し、紙製容器を使用した弁当「IROCORO（いろいろ）」シリーズを発売した。すし、おにぎりや一口サイズのおかずを詰め合わせ、少しずつ多様な種類を食べたいというニーズに応えた。紙製容器の使用により年間9.9トンのプラスチック使用量削減につなげる考え。環境意識の高い女性層の需要を狙う。

弁当はすし、おにぎりをベースに計3商品をそろえた。6種類のすしを詰め合わせた「はなまめ寿司」はサケとイクラ、エビマヨなどのすしを組み合わせた。価格は各399円。ローソン店舗で販売する。沖縄県や中国、四国地方では一部商品を販売しない。

紙製の弁当容器を使うことで、プラスチック製の容器を使う場合と比べてプラスチックの使用量を年間で約9.9トン減らせるという。ローソンは容器の包装プラスチックの使用量を、2030年までに17年度比で30%減らすことを目指している。

ローソンは19年秋に初めて常温で食べる弁当の容器に紙素材を採用。紙素材には油や水の汚れがつきにくい工夫を施した。今回発売するシリーズでは紙容器の技術を活用し、より女性が食べやすい大きさや中身の商品を目指した。

(2020/09/11 日経MJ)

見た目にも可愛く、女性ウケしそうな商品だ。様々な場所でプラスチック削減が進んでいるが、まだまだ身の回りにはプラスチック製品が溢れ、どこから削減していけば良いか各社模索中のように感じる。プラに代わる「新しい製品」をつくって広めるよりも、一度原点に還り「プラでなくても大丈夫なもの」はないだろうか、生活する上でも考えていきたい。

---

2) 「すかいらーく、食べきれなかった料理の持ち帰り推奨で食品ロス削減」

すかいらーくホールディングスは9月10日、食品ロス削減の取り組みとして、お客が料理を食べきれなかった際は、持ち帰りを推奨し、持ち帰り用の容器「すかいらーくもったいないパック」を無料で提供すると発表した。

環境省によれば、2017年度に廃棄された食品は約612万トンにのぼる。また、2015年に国際連合で採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」のターゲットの1つ「つくる責任つかう責任」では、「2030年までに世界の食料廃棄を半減する」という目標が掲げられ、食品ロス問題への取り組みが課題となっている。

すかいらーくグループでは、食品ロス削減の問題に早くから取り組んでおり、全国に10カ所あるセントラルキッチンで必要な分だけ生産し、定期的に店舗に配送している。

ご飯の量を選択可能にしたり、単品メニューを提供するなど、お客に残さず食べてもらう工夫をしている。少量の食事を希望する60歳以上のお客がキッズメニューを注文することもある。

これまでもお客が食べきれなかった料理の持ち帰りを希望する際には容器を提供していた。今回、ガスト、バーミヤン、ジョナサンのデジタルメニューブックに専用ボタンを掲載するほか、ウェブサイトの特設動画を掲載し、持ち帰りを推奨する。

今後も事業を通じたSDGsへの貢献を重要課題と位置づけ、サステナビリティと社会価値増大を実現するため、さまざまな社会問題に取り組むという。

なお、持ち帰りは、一部食べ放題のブランドや生ものは対象外となる。

(2020/09/11 流通ニュース)

プラスチック削減が大きく謳われている今、お持ち帰り容器がプラスチックであることに少し疑問を抱いてしまった。ご飯だけでなく食事全体の量を調節可能にしたり、あらかじめ量の確認ができたりと持ち帰る以前の工夫を徹底すれば余分なゴミを増やさずに済むのではないだろうか。飲食店での食べ残しは想像以上に多く、特にビュッフェ形式のホテル朝食などは消費者には見えないところで大量に廃棄されているという事実もあり、時間をかけて解決しなければならない問題だと考えさせられた。

### 3) 「日本テトラパック、ミネラルウォーターを紙容器で複数メーカーに供給開始」

日本テトラパックは、このほど「ミネラルウォーター市場での紙容器の展開」をテーマにオンラインによるメディア・ラウンドテーブルを開催し、ミネラルウォーター市場への小型紙容器の国内展開を開始すると発表。再生可能資源の活用によりプラスチック使用量を最小化することをアピールし、新たな選択肢として多様なサイズ・形状の紙容器を提案していく考えを示した。

この中で同社は、「ミネラルウォーターは日本の飲料の15%を占める重要カテゴリー」「毎年平均4%の成長率を見せる有望なカテゴリー」など、日本のミネラルウォーター市場の現状を示した上で「ミネラルウォーターにおいてテトラパック紙容器が貢献できることは中身を守る、持続可能性、輸送効率の良さ、差別化と機能性、コミュニケーションツール」「開けやすいキャップ、ドリームキャップの開栓に要する力はPETボトルの半分」「ロールで充填工場に納入するため輸送効率が良い」と紙容器の特性を強調。プラスチックごみ削減が注目される中で、日本でもミネラルウォーターを検討する企業が増えていると説明した。

国内展開を開始した「テトラ・プリズマ・アセプティック330スクエアドリームキャップ26」は、主に再生可能資源である紙を使用した容器で、手にフィットする持ちやすさ、軽い力で開けられる便利なキャップ、インパクトのある形状が特徴。2013年に初めて日本市場に導入され、現在14社約130製品に採用されているが、ミネラルウォーター類はこれが初めて。三井農林やハバリーズなど複数の国内飲料メーカーへの供給が決まっている。

大型紙容器は「テトラ・ブリック・アセプティック1000スリム」容器でミネラルウォーター類の採用実績があり、今年、所沢市制施行70周年を記念して、所沢市が実施するプラスチックごみ削減に向けた取り組みの一環として「テトラ・ジェミーナ・アセプティック1000リーフ」容器を採用した飲料を販売するなど、紙容器への注目が高まっている。

発表会の中で鍛冶葉子執行役員マーケティングディレクターは「既にPETボトルから紙容器へ変更したいとの問い合わせや、紙容器入りのミネラルウォーターを新たに導入したい

といった問い合わせをいただいている」と述べ、金井路也サステナビリティ部ディレクターは「世界トップクラスのリサイクル先進国の日本は、プラスチックから紙素材へという動きがさまざまな場面で出ている」と指摘し、積極的に取り組む姿勢を示した。

現在、アルミ付紙パックをリサイクルできる製紙メーカーは全国に点在しており、東京都内ではスーパー7社、生協3社が回収拠点を持ち、小売の店頭回収や自治体等の集団回収がない場所は、2008年からスタートしたテトラパック・リサイクル便で回収に努めている。

(2020/09/04 食品新聞)

プラスチックを削減して、リサイクルの際に排出するCO2を減らすには紙パックの代用が効果的なのかもしれないが、不純物の混入の目視ができなくなることや、キャップにプラスチックを使う点など、どのように対応していくのか気になる点もある。この他にもエコのために様々な代用品が生まれてきているが、どこもかしこもバラバラの取り組みでは一向に浸透しないと思う。規格・仕様・回収体制の整備で、日本が一つになって取り組みをする必要があると思う。

---

#### 4) 「米ウーバー、エコカー配車可能に」

米ウーバーテクノロジーズはライドシェアアプリの利用者が、エコカーの配車を指定できる機能を北米で始めた。エコカーの運転手には追加報酬を払うことで電気自動車（EV）などへの乗り換えを促し、自社サービスを通じた温暖化ガスの排出量を抑える考えだ。

1ドル（約106円）の追加料金でEVやハイブリッド車（HV）の配車を頼める新機能「ウーバーグリーン」をサンフランシスコやシカゴ、トロントなど北米の約15都市で始めた。これまで追加料金を払って大型車や高級車を指定する機能はあったが、エコカーを選べるのは初めて。年末までに世界の65以上の都市で新機能を利用できるようにする。

エコカーを使ってライドシェアサービスを提供する運転手はウーバーグリーンの乗車を完了するたびに0.5ドルの追加報酬を受け取れる。

(2020/09/13 日経MJ)

日本では規制のためウーバー配車が東京のタクシーに限られるが、最近ではエコカーのタクシーなども増えており乗車客が自ら選択できる時代になってきたと感じる。運転手に追加報酬イコール乗客に追加料金という取り組みで、サービス開始当初は普及に繋がるかもしれないが、持続性を考えると料金で差別化する必要はないのかもしれない。